

帝国農会幹事 岡田温⁽⁶⁾

—— 愛媛県農会技師時代④ ——

川 東 埤 弘

目 次

はじめに

大正8年

大正9年

大正10年

は じ め に

前稿¹⁾で、帝国農会幹事・岡田温（おかだ ゆたか）の愛媛県農会技師時代（明治38年5月～大正10年4月）の活動のうち、大正2年（1913）から7年までを考察したが、本稿では、大正8年から10年4月までの温の活動について考察していくこととする。愛媛県での活動の最終時期である。

本時期は第1次世界大戦が終結し、政治的には大正デモクラシーの高揚期であり、農民の政治的自覚・目覚めの時代である。また、経済的には大正9年に戦後恐慌が勃発し、農業・農村は恐慌に見舞われ、農業危機発生の中で、農民の経済的自覚・目覚めにより米投げ売り防止運動が展開された時代である。この農業・農村危機下、温は中央の帝国農会での活動要請を受け、大正10年4月16日に帝国農会幹事に就任するが、それまでの愛媛県農会時代の活動状況を見てみよう。

1) 拙稿「帝国農会幹事 岡田温⁽⁵⁾—愛媛県農会技師時代③—」（『松山大学論集』第17巻第5号、2005年12月）。

第1章 大正8年

大正8年(1919)、温48歳の年である。温は、愛媛県農会技師としての本来の活動のほかに、愛媛県技師を務め、特に、大正7年からは愛媛県産業調査の主任として、産業調査に従事し、双方の業務を行っていた。だが、残念ながら本年の温の「日誌」は行方不明で、欠落している。また、『愛媛県農会事業報告』も、大正8年は2月～4月の3ヶ月分しかなく、本年の温の農会活動を十分見ることは出来ない。ただ、大正9年8月の『愛媛県農会事業報告』215号のなかに大正8年度(大正8年4月～9年3月)の県農会の会務報告があるので、それらをもとに、本年の温の農会活動の一端を見てみよう。

愛媛県農会の会長は青野岩平(大正6年4月～9年4月)、副会長は宮内長(大正7年11月～9年4月)、常任幹事は門田晋(大正3年4月～9年4月)が続け、温はその下で技師として活動した。なお、技師は温の外に常光恭一(大正7年4月1日～9年4月27日)がいた。

1～3月、温はよく出張し、講義を行った。1月10日、温は愛媛県農会主催の農家家計講習会講師として、新居郡に出張し、11、12日は泉川小学校にて、13、14日は西条町郡会議事堂にて、講義を行い、17日に帰松した。2月4日は喜多郡主催の農政研究会に出張し、講義し、7日帰松し、また、13、14日の両日は伊予郡に出張し、郡中町彩濱館にて農家家計講習会の講師を務めた。また、15日からは南予の諸郡に出張し、17、18日は西宇和郡郡役所議事堂にて、22、23日は東宇和郡野村町の公会堂にて、26、27日は北宇和郡好藤村にて、農家家計講習会の講師を務めた。3月にもよく出張し、6、7日は上浮穴郡仕七川村にて、17、18日は周桑郡丹原町にて、農家家計講習会の講師を務めた。さらに、県農会は婦人の知能を啓発し、その修養を促さんために、婦人講習会を企画し、温は、24日より4日間新居郡西条町郡立高等女学校にて、29日より4日間松山市私立済美女学校で、講習会を行い、温は船田操(済美高等女学校の創立者、愛国婦人会等愛媛の婦人団体のリーダー。明治5年生

まれ)らとともに講師を務め、温は「農業経済」について講義した²⁾

このように、1～3月、温は農家家計講習会によく従事していたことがわかる。この農家家計講習は大正6年度からの特別事業で、県農会編纂の家計簿を受講者に無償で配布し、家計の記録、計算、ならびにその活用方法を講義するものであった。時、あたかも農村は、積年の経済的窮迫に苦悶し、家計の合理化の必要性を痛感している時期であり、受講生が多く、1,892名に達した。なお、農会は創立以来、農事改良・生産指導が中心であったが、この農家家計講習会は農会事業が多角化していく(農事改良とともに農村生活改良・指導)嚆矢であると評価されている³⁾

4～6月も温は種々出張、業務を行った。5月1日、2日の両日は伊予郡郡中町に行き、第19回愛媛県農事大会(伊予郡農会主催)に出張。27日～29日にかけては、戸田農商務省事務官が県下の農会事務視察に来松し、同行した(27日温泉郡荏原村、28日伊予郡松前村、29日越智郡日高村)。6月11日～14日にかけて、越智郡今治町における町村農会長会に出席、21日には県農会評議員会を開催した。

6月23日～7月7日までは東京に出張し、農商務省の会議、帝国農会の会議(道府県農会主任技師協議会)、柑橘中央会の会議に出席した。

東京から帰って以降、7～9月も温は種々調査、講義等に従事した。7月28日～8月8日までは喜多郡久米村に農業基本調査のために出張し、8月22日は温泉郡余土村に行き、青年に対し講話し、また、26日は伊予郡北伊予村に行き、講話を行った。9月17日～23日までは北宇和郡宇和島町に行き、町村農会技術員講習会に出席し、講義を行った。

10月以降も温は出張、講話等に従事した。10月20日～24日までは神戸に出張し、関西府県農会聯合販売斡旋所協議会に出席した⁴⁾

2)『愛媛県農会事業報告』第199号、大正8年2月～201号、大正8年4月。

3)岡田慎吾『愛媛県農業発達史』愛媛県高等農業講習所、昭和43年、94頁。

4)『愛媛県農会事業報告』215号、大正9年8月。

10月28日～30日の3日間、県農会主催の町村農会協議会を松山市公会堂にて開催した。大正8年は第1次大戦後の大変動期(経済界と思想界)にあたり、世界改造の気運もあり、県下各地より予想以上の町村農会長等が出席している(295町村中285名出席)。この協議会では、中央から農商務省技師の飯岡清雄が講師として、「戦後の町村農会経営」と題した講演を3日間にわたり行い、出席者に「非常の感動」と「充分の満足」を与えた。また、県農会は協議事項として、「町村農会ニテ施行スヘキ適当ナル事業並ニ具体的実施方法ノ考案」「農業問題ト社会問題トノ衝突スル場合ニ於ル対策如何」等を提案し、温が説明し、審議している。その結果、前者については、会費の強制徴収権、町村農会への技術員の設置普及と俸給費の5割以上の補助、農業基本調査の普及増進、昨年来の政府の米価調節政策は生産者を圧迫するもので、公平なる政策を要求する、等々の意見が出され、また、後者については、従来社会問題の美名の下に農業者が犠牲を強いられてきたことに鑑み、いかにして農業者の利益擁護をはかるか、ということに対し、農民の主張を代弁する新聞の発刊を決議している⁵⁾。

12月9日に評議員会、12月10日より12日まで3日間、本会事務所楼上で、通常総会を開催した。

以上は、愛媛県農会活動に関する事項であり、例年に比すると、温の農会活動ははるかに少ない。それは、この時期、温は愛媛県技師として、愛媛県産業調査の主任として、前年から産業調査に専念しており、全県下の町村の指導のため、出張していたものと思われるが、残念ながら、その活動状況は不明である。

なお、温の家族のことなどについて述べておこう。温の実家の石井村南土居には、母ヨシ(嘉永4年10月2日生まれ、67歳)、妻イワ(明治8年8月22日生まれ、43歳)がいる。子供は娘で長女の清香(明治28年3月21日生ま

5)『愛媛県農会事業報告』第209号、大正9年1月。

れ、23歳)、次女の禎子(明治35年2月2日生まれ、16歳)、4女の綾子(明治41年10月1日生まれ、10歳)、長男の慎吾(大正元年8月23日生まれ、6歳)がいる。このうち、長女の清香は大正2年に南吉井村の末光徳太郎の4男・末光順一郎に嫁ぎ、3児(照香、深雪、権一郎)の母となっていた。次女の禎子は前年の大正7年3月愛媛県立松山高等女学校(現松山南高等学校)を卒業し、自宅におり、農業等の手伝いをしていた。禎子は、4月上京し、東京女子医専に入学するが、厳しい校風があわず、1週間で退学する。

温の兄弟姉妹では、妹長女シカ(明治7年7月19日生まれ、44歳、明治26年11月浮穴村の橘栄次郎に嫁ぐ)、弟次男宏太郎(明治11年2月27日生まれ、40歳、松山市新玉町の安長キヨへ養子)、妹次女クマ(明治14年2月10日生まれ、37歳、40年3月松山市久保田の高木悌之助に嫁ぐ)、妹3女ケイ(明治18年1月23日生まれ、33歳、38年4月に新宅の岡田朋義に嫁いだが、離婚)、妹4女シゲオ(明治28年10月17日生まれ、23歳、大正6年12月北吉井村和田富太郎の3男登に嫁ぐ)がいる(なお、年齢は1月1日現在)。このうち、温の妹のケイは、東京にいた(住所は西多摩郡調布村千ヶ瀬榎本政次郎内)。

第2章 大正9年

大正9年(1920)、温49歳の年である。本年は「日誌」がある。温は、愛媛県農会技師として活動し、また、愛媛県技師として、愛媛県産業調査活動に従事した。

本年は、大戦後の戦後恐慌の年であり、米価暴落の年でもあり、農民の経済的目覚めの時代であり、農会の米投げ売り防止運動が行われた年であった。また、本年は大正デモクラシー期であり、農民の政治的目覚めの時代であり、総選挙に農民代表を選出しようとの声・運動が起こり、愛媛では候補者に温があがった(謝絶するが)。さらに、温に対し、農業・農村危機下、帝国農会強化のため、幹事就任への勧誘があった(当初拒否していたが、翌10年4月から

就任)。

とにかく本年は激動期であり、大変興味深い年であり、また、温の人生にとっても飛躍の年である。以下、少し詳しく見てみよう。

第1節 愛媛県農会技師・愛媛県技師活動

温は、1月6日から業務を開始している。大体午前は県庁に行き、産業調査の仕事、午後は農会に行き、農会の業務に従事している。

1月17～19日は、例年と同様に郡農会長会及び郡農会技術者を開催し、大正9年度の県農会の施設事業等を決めている。農業基本調査、町村農会技術者の増設、講習会の開催（町村農会職員講習、女子農事講習、桑苗育成講習）、桑園経済試験、農産物販売斡旋、町村農会事業研究会、郡町村農会長団体農事視察、四国園芸共進会、麦多収穫品評会、等々⁶⁾

1月22日、温は午前7時半発の船にて高浜港を出発し、東京における文部省主催の生活改善講習会などに出席するため、上京の途につき、翌23日午後1時半着京。この日は農商務省を訪問し、飯岡清雄技師の一件を聞き、また、牛込にある販売斡旋処を訪問し、飯岡清雄に面会している。24日も農商務省を訪問、副業の話聞いている。25日は午後高等師範学校における生活改善同盟会発会式に、夜は神田猿樂町の明治館における生活改善講演会に出席した。26日から31日まで生活改善講習会に参加した。愛媛県からは、木村亘技師（学校衛生主事）、今治の曾我部右吉、加藤和一郎県農会技手も参加していた。講習会が終わって、翌2月1日、温は、横井時敬先生を訪問し、農事大会講師の件を依頼したが、暇がないと、拒絶されている。2日は三輪田元道氏を訪問し、禎子のことを依頼している。3日は久松伯邸を訪宅し、内藤素行（鳴雪）氏らに面会し、あと、東京女子大学を訪問し、安井てつ⁷⁾（東京女子大学監）に面会し、入学に関する校規を聞いている。4日は統計局及び農商務省を

6)『愛媛県農会事業報告』第210号、大正9年3月。

訪問し、石黒農政課長、伊藤農産課長、副嶋会計課長に面会。5日は宮仲に越智家族を訪問。6日は西多摩郡調布村の小学校に、妹のケイを訪問。7日、農務局長を訪問し、飯岡氏の件を談じ、夜9時発の急行にて帰途に就いた。翌8日11時半大阪下車し、午後4時発第六宇和嶋丸に乗船し、9日午後5時帰宅した。

東京から帰国後、温は、県農会、また、県庁・産業調査の業務、自作の農業等を行った。2月15日には、温泉郡南吉井村の信用組合及び村農会総会に出席し、約300人に対し、農業経済に関する講話、19日は県庁にて勸業懇談会を開催し、生活改善講習概況の講話、24日は温泉郡川上村へ行き、来会者200余名に対し、農家経済講話、生活改善の一端及び簿記記載方の講話、28日は温泉郡主催3郡1市勸業協議会に出席、等々。なお、この月末、娘の清香の夫・末光順一郎やその娘・深雪(温の孫)が亡くなる不幸に遭遇している(後述)。

3月も、温は、県庁・産業調査の業務、県農会の業務、講話、出張等に従事した。6日から技術者養成処の生徒に対し講義を始めた(～22日)。その間、10日砥部村青年会総会に出席し、青年修養に関する講話もしている。

3月23日、温は、第20回愛媛県農事大会(東宇和郡主催)出席のため、東宇和郡宇和町に出張した。この日船が遅れて高浜8時半発が12時となり、9時半八幡浜に着し、投宿し、翌24日、借切馬車にて宇和町に向かい、山松屋投宿。25、26日の両日、宇和町卯ノ町にて農事大会を開催。但し、会長及び副会長共に遅れたため、温が一切を代理して大会を執行した。中央からの講師は東京農業大学教授・東京高等師範教授の中島信虎で、「現代の社会問題と農業との関係」と題し、講演した。26日午後1時半農事大会が終わり、後、共進会授賞式を挙行した。農事大会では、「現下の労働問題の農業労働に及ぼす影響並に其調節策如何」「農民倶楽部をして意義ある活動をなさしむる良法如

7) 女子高等教育の発展に尽くした教育者。明治3年東京に生まれる。23年女子高等師範学校を卒業。直ちに母校の助教諭となる。30年イギリス留学。33年帰国し、母校の教授兼舎監。同年海老名弾正から授洗。大正7年東京女子大創立とともに学監となり、後、12年から東京女子大学長となる。

何」等が協議され、前者については、地主・小作者の自覚を促し、年来の円満なる関係を持続し、労働問題の渦中に巻き込まれないように努めること、後者については農民の政治的自覚（政党的にあらず）を促すこと、などが決議された⁸⁾。終わって、温は、5時卯ノ町を出発し、八幡浜に向かい、10時半発の第13宇和島丸にて帰途につき、翌27日10時高浜に着した。そして、午後1時より県公会堂にて、温泉郡農会主催の中嶋信虎博士一行の講演会を開催し、夜は大和屋にて小宴するなど多忙であった。

4月も温は種々業務を行った。午前は県庁、午後は農会に出勤している。1日には技術者養成処の卒業者の就任地を決め、2日には、個人面談をし、6日に辞令を渡している。13日以降は、県の産業調査の作表を作成等している。また、22～25日には久米村に行き、婦人講習を行っている。

4月27日には、愛媛県農会臨時総会を開会し、任期満了に伴う役員の改選が行われ、新会長に亀岡哲夫（喜多郡三善村，山林地主，元三善村長，元県議），新副会長に井谷正命（北宇和郡日吉村，地主，元日吉村長，元県議）が選出された。幹事は門田晋が引き続き任命された。温も引き続き技師を務めた。なお、もう一人の技師常光恭一が一身上の都合で退職し、技手の多田隆が技師に昇格した。

4月29日は、北宇和郡農政倶楽部総会に出席のため、宇和島に出張した。翌30日総会に出席し、終わって、午後7時発にて帰松した。

なお、この4月には、原政友会内閣下の、来る第14回衆議院選挙（5月10日）に向けての農民側の動きが活発化し、各町村で農政倶楽部が設立され、また、選挙に農民側の代表擁立の動きがあり、温が候補にあげられている（後述）。

5月は総選挙に関する活動のほか、講演や産業調査、県農会の種々の業務に従事した。1日は午後7時より伊予日々新聞主催の通俗講演会に臨み「生活改

8)『愛媛県農会事業報告』第211号，大正9年4月。

善ノ研究」と題して講話，7日から産業調査の発表の準備，15日には福岡県三井郡の有志13名が視察に来県し，講話，18日からは南久米村基本調査の結論部分の起草，等々。

6月は出張の日々であった。6日，温は帝国農会における道府県農会役職員協議会のため，また，産業調査の用にて東北・北陸地方視察のため，上京の途についた。この日12時広島に上陸したが，体調不良のため，広島にて1泊し，翌7日3時の急行にて東上した。途中の8日は浜松にて織物を，焼津にて漁業組合を視察し，静岡に宿泊。9日は静岡県庁，工業試験場，県農会，焼津漁業組合を視察し，3時発にて上京し，京橋城辺館に投宿した。10日から14日まで道府県農会役職員協議会に出席した。この会議では，大戦後の農業恐慌下(米価，繭価暴落)，「農業界ノ不況ニ対シ，農会ノトルベキ方策」「系統農会ノ業務施行上現行農会法，農会令其ノ他ニ於テ不便ナリトナス事項」が協議された。そして，前者の農業不況対策として，政府に対し政府保管米払い下げ中止，米の輸入関税の復旧，繭への融資等，農業者に対し米穀の投げ売りを戒め，平均売りの励行，農業倉庫の普及等，養蚕家に対し繭の貯蔵保管を十分な施設に於て行うこと，繭の売買価格は横浜の糸価を標準とすること，等が決議されている。また，後者の農会法・農会令改正については，農会の目的を農事の改良発達だけでなく，経済上の施設，経営事業，ならびに山林に関する事業を目的に入れるよう改正すること，また，国庫補助金の15万円から60万円への引き上げ等が決議された。そして，温らが決議を実行する運動委員に選ばれている⁹⁾。15日は農商務省の会議に出席し，16日は原熙，古在先生を訪問し，会議の決議を伝え，協力を要請している。この日の「日誌」に「今回ノ決議，帝国農会改造ニ関シ運動委員ノ意ヲ以テ，京都大島，宮城管野，島根梶ト自分ハ囑托サレ，大島ハ帰国シ，残り三人ニテ駒場ニ原氏ヲ，西ヶ原ニ古在氏訪ヒ，決議ノ意ヲ伝ヘ，盡力ヲ望ム。両氏共快諾」とある。

9)『帝国農会史稿 資料編』985，986頁。

6月17日から温は産業調査のために東北、北陸地方に視察に出かけた。この日は福島に行き、翌18日福島を視察。19日は松島に行き、遊び、仙台に帰り宿泊。20日は仙台の物産陳列場、公設市場を見学し、山形に行き、宿泊。21日は山形市に滞在し調査。22日は山形原蚕種製造所を訪問し、会津若松市に行き、宿泊。23日は会津若松の工業学校を参観し、白虎隊を墓参し、新潟に行き、宿泊。24日は新潟県農会、物産陳列場、染織試験場参観。25日は金沢に行き、宿泊。26日は金沢の工業学校、物産陳列場を参観。石川県に向かい、山中町に宿泊。27日は九谷焼窯元須田青華氏を訪問し、工場を視察。28日に帰途につき、29日12時尾道に着し、船に乗り、高浜に向かい、夜9時腕車にて帰宅した。

7月も温は県庁・産業調査、県農会の種々の業務を行っていたが、前半は比較的閑で、自宅の農業等によく従事していた（後述）。

7月21日、温は周桑郡主催の篤農家講習会のために丹原に出張し、翌22日朝7時より午後3時半まで農政の講習を行い、23日帰松した。25日は喜多郡農会主催の町村農会役職員講習のため、午後1時半郡中発の自動車にて、大洲町に行った。翌26日は午前9時より午後3時まで、27日は午前8時より午後2時半まで、農会技術者約50名に対し、農政一般について講義を行った。終わって、農政倶楽部の設立の会合に出席。28日は麦多収穫品評会に出席し、授与式を挙行した。その後、三善村に行き、農家5、6戸を巡視した。三善村は養蚕が盛んであり、家内全部を養蚕に使用していた。29日は三善村にて、農村生活について講話し、長浜に出て、船にて郡中に戻り、帰松した。

8月も温は種々業務を行った。2日は伊予鉄道会社楼上にて愛媛新報一万号記念祝賀事業の「愛媛県産業政策」の審査、7日は公会堂にて国勢調査宣伝講演会に出席、夜は、第2回石井村青年有志の会合に出席した。9日以降は産業調査の業務等を行い、また、13日には農商課にて技術者養成処の件についての会議、19日には越智郡麦多収品評会授賞式に出席した。21日には、松山市公会堂にて生活改善同盟会発起者会を開いた。70余名が出席し、和田県内務

部長が座長となり、規約の討議を行ったが、決まらず、議論百出している。

8月23日に荏原の叔母(クマ、温の母の妹、岡田三郎に嫁いでいた)が危篤となり、夜死去し、そのため温は2回往復し、また24日には葬儀の幹旋で荏原に行き、温は非常に疲労している。25日、温は体調不良となり、26日に発熱していたが、講演のため、朝8時発にて宇摩郡へ出張の途についた。この日は西条に宿泊した。だが、発熱が続いた。「発熱…気分不良ノタメ入浴ヲセス。粥ト少量ノ副食ヲ取り、ヒラミンヲ服シテ就寝」。翌27日6時半発自動車にて土居に行き、8時50分発汽車にて三嶋村に行き、直に腕車にて寒川村に行き、さらに川之江町に行き、杉源旅館に投宿した。このとき温の体温が急上昇していた。「宿ニ着キ、体温ヲ測レハ三九・五分。大ニ驚キ腕車ニテ三宅医師ニ行キ診断ス。其時正ニ四〇、帰リテ其手当ヲナシ、全ク病床ニ就ク去二十二日以来ノ暑氣ト過勞ノ結果ナラン」。以降、9月2日まで温は旅館にて臥せていた。9月3日、ようやく直り、8時発の吉野川丸にて帰途に着いた。4日、荏原の岡田三郎叔父が脳溢血のため危篤となり、亡くなったが、温は病氣のため、葬儀に出席できていない。

9月はじめ、温は自宅にて休養を続けた。体温は下がったものの、体調はまだ完全に回復していなかった。だが、その間も、訪問客があり、また、種々仕事を指示したり、家計簿の整理などしていた。11日、温はまだ少し熱があったが、無理して生活改善同盟会規約起草委員会に出席した。その結果、またまた発熱した。この日の「日誌」に「朝来少シ熱度高ク、気分スクレズ。…今[日]、後一時ヨリ赤十字社樓上ニテ生活改善同盟会規約起草委員会ニ付是非出席セサルヘカラサリシヲ以テ、十一時半ヨリ腕車ニテ静カニ出松。産業調査ニ立寄り(北宇和ノ赤松君ニ面会)、一寸ヨリ右委員会ニ出席ス。議論家揃ヒナリシヲ以テ、各条議論アリシモ、規約ハ議了シ、次テ実行及研究事項ノ討議ニ移ル。時ニ四時過。自分ハ発熱シ三七・五トナリシヲ以テ中座シ帰ル。途中、木原屋ニテ紙ヲ購ヒタルカ、其前後非常ニ苦シカリシ。蓋シ多少神莖作用ノアリタルヘシ。五時半帰宅、熱三七・三分。少シ逆戻リシタリ」とある。以降、休養し

たが、熱下がらず、気分勝れず、苦勞している。13日「本日ハ前日来ヨリ稍熱度高ク、朝三六・六ヨリ三六・八トナリ、終日三六・七ニテ気分勝レス」、15日「本日モ尚熱稍高く、気分勝レス。要スルニー昨日来減退ノ模様ナシ」等々。

温の病氣は、熱射病の様であった。17日の「日誌」に「多田英治君、午后三時過來診セラレ。周到親切ニ診断セラレ、最早病原ト思フモノナク且ツチフスニアラス。ヲ、ダンニアラス。日射病ノ熱ニテ、コレハ比較的ニ回復ノ長クナルモノナリト…当分ノ間食物ハ今日迄ノ如ク且ツ運動ヲセス静養ヲ要スト。右ニテ安心ス」とある。

9月21、22日県農会事務所楼上で、郡農会技術員協議会が開催された。温は21日は休んだが、22日はまだ少し熱があったが（36度8分）、無理して出席し、挨拶した。今回は、前回の11日ほどは疲労しなかった。その後も、温は休養し、少しよくなると、仕事をし、熱を出している。26日「午前中、熱心ニ産・調ノ結果改良案ヲ草ス。右等ノタメカ少シ発熱ス。三六・八。午后五時門外ヲ散歩ス。時ニ体温三六・七トナリ、矢張医師ノ如ク絶対安静ガ良好ナリ」。30日、ほとんど回復したと思い、出勤した。しかし、また発熱した。この日の「日誌」に「殆ト回復シタルヲ以テ出勤ス。最早大丈夫ト思ヒ徒歩ニテ静カニ停車場ニ行ク。中途重松ニテ休憩シ、米売却ノ約束ヲナス。何分三十五日ノ長道歩行ノコトニテ疲労ヲ感シ、松山駅ヨリハ腕車ニテ行ク。約二時間弱用務ヲ見、腕車ニテ帰宅ス。…稍運動過劇ナリシニヤ、疲労ト発熱ヲ感ス。三十七度トナル。今朝床払ヲナサシメタルカ、再ヒ床ヲ伸ヘ静養ス。サテモシツコキ病氣ナルカナ」。

なお、温の闘病中の9月、米価が暴落した。6日の「日誌」に「先日来ヨリ定期大ニ下落シ、正米モ下落」とある。12日の「日誌」にも「米価は下落一方ナリ」とある。1920年農業恐慌の発生である。

また、9月7日、恩師の玉利喜造から帝国農会入りの勧誘の手紙が来ている。「玉利先生ヨリ帝国農会へ出勤スヘキヤノ誘ヒ的御手紙ヲ受ク」。それに対

し、温は、14日に玉利に対し、辞退の手紙を出している。「玉利先生ニ帝国農会改善及自分幹事トナレトノ勧誘、辞退ノ手紙ヲ出ス」。

10月、温は、まだ体調は勝れなかったが、県農会、県庁に出勤し、業務を始めた。2日は腕車にて出勤し、初めて事務をとったが、帰宅後、体温36.85となっている。3日は日曜で休んだが、4日は腕車にて出勤した。帰後、浸汗、疲労を強く感じている。5日は県農会に出勤し、来年度予算等について協議、6～8日は産業調査の事務・作表、10日は産業調査の来年度予算の査定協議、等々。

温が愛媛県で農会業務に従事していた、10月4日～8日、中央の帝国農会で第11回通常総会が開催された。丁度この時期は戦後恐慌の時期であり、農務省新設に関する建議、米価維持に関する建議、米及び粳の輸入税復旧ならびに米、小麦粉輸出許可制限廃止に関する建議等が出され、また、人事の改選が行われ、会長は松平康莊が続けたが（大正2年～15年）、副会長には桑田熊蔵に代わり、新しく矢作栄蔵（東京帝大教授、帝国農会特別議員）が選出された¹⁰⁾。

10月11日、温は、喜多郡大成村講習のために出張した。この日郡中9時発の自動車にて11時内子に着き、人力車にて大成村に行き、村長栗田氏宅にて中食をし、川船にて下り、大字森山に上陸し、村役場に立寄り、黒川鎚忠宅に宿泊。翌12日は午前9時半より午後4時まで定林寺にて有志青年50名内外に対し、講話し、13日も9時より午後4時まで、大成村民250余名に対し、消費に関し講話を行った。村民は静粛に謹聴し、温は「自分モ亦近來無比ノ講話ヲナシ得タリ」と述べている。なお、講義の間の正午過ぎより約1時間、亀岡会長を迎え、証書授与式を挙行している。そして、この日、農事改良研究会及び農政倶楽部支部を設立している。翌14日、内子に出て、自動車に乗り、帰宅した。

10月17日は伊予郡農友会第2回会合に出席し、農業教育を受けた者の今後

10)『帝国農会史稿 記述編』213、220頁。

の注意事項について講話。18日は温泉郡農会主催農政倶楽部会に出席。19日は喜多郡主催自治展覧会出品物審査のため出張した。この日午前9時郡中発で、正午大洲に着し、直に郡役処楼上にて出品物の審査に従事した。20日、21日終日審査し、終えた。翌22日は原蚕種製造処にて生徒に約5時間講義。23日は午前自治展覧会開会式。午後原蚕種製造処にて講義。24日は午前自治展覧会褒賞授与式。午後講義。25日は午前原蚕種製造処にて講義し、終了した。翌26日、温は自動車にて、帰松した。月末は産調に出勤し、作表その他を行った。

なお、10月、農業恐慌は進み、米価が暴落している。3日の「日誌」に「粳米十俵、糯米一俵ノ売却方ヲ重松ニ托ス。目下相場粳三十五円内外、糯四十二円内外ナリ。顧レバ昨年末ハ五十五円ハ二、三週間モアリ。五十七、八円ノ相場モアリタルニ、本年ノ不作ヲ予想シテ持続ケタルニ天候順調ナルト古米ノ多キト及諸株綿系ノ大崩落ノ綜合ニテ、今日ノ如ク下落セリ」とある。

なお、温への帝国農会入りの勧誘について、原熙先生からも要請があったが、断っている。10月18日「原先生へ帝国農会へ就任不可能ノ手紙ヲ出ス」。

11月も温は、県農会、産業調査等の業務を行った。2日県農会に出勤し、門田幹事と明年度予算編成の相談をし、産調へも出勤し、諸事指揮をなしている。なお、この日、農林省の石黒忠篤農政課長から、「小作問題研究に対する上京希望」の手紙が来た。それに対し、温は4日、石黒農政課長へ小作制度調査委員会囑託承諾の返書を出している¹¹⁾。5日、温は産業調査用で業者からの聞き取りのため、今治に出張した。この日は織物業者の希望要件を聞き取り、翌6日午前も聞き取り、午後は工場の視察。7日は瓦業者、漆器業者から、8

11) 大正8年7月9日農政課長に就任した石黒忠篤は、多年心のなかで燃焼させていた小作制度の改善のために、小作制度のあり方を根本的に調査するための官民共同研究機関を作ることと考え、大正9年11月27日官制によらず農商務省内の大臣諮問機関として「小作制度調査委員会」を設置した。同年12月、その囑託の委員に岡田温が任命された(温の「履歴書」、橋本伝左衛門、那須皓、大槻正男、東畑精一監修『石黒忠篤伝』岩波書店、昭和44年、155頁)。

日は染織業者から希望要件を聴き、翌9日帰松した。11日には、産業調査用で北宇和郡に出張した。この日群山丸にて発し、8時宇和島に着し、明治館に投宿。翌12日には北宇和郡役所にて水産業者から、13日は染織業者、製糸業者から、14日は製紙、醸造、その他工業者から意見聴取。15日は午前水産試験場を訪問し、種々調査及び近藤場長の意見を聴き取り、三嶋村に行き、小松に着し、小松屋に投宿。16日は小松にて、午前9時より午後2時まで農民生活について670余名に対し講話した。終わって、宇和島に戻った。17日は午前、渡部水産試験場技師に試験場改造に関する意見を交換し、その夜7時発にて帰松の途に着き、翌18日8時半高浜に着した。19日は水産大会に出席し、その間県農会に行き、総会準備の協議を行っている。

11月22日、23日の両日、県農会事務所にて評議員会を開催し、24～26日の3日間、県農会通常総会を開催した。この総会で、人事の改選はなく、引き続き、亀岡会長、井谷副会長、門田幹事の体制が続いた。また、農業恐慌・米価暴落の折、米価調節の儀に付き、内閣総理大臣、農商務大臣、大蔵大臣への建議を議決している¹²⁾29日には、温は帝国農会へ提出すべき農商務大臣諮問農業労働者問題答申案を起草している。

なお、温の帝国農会入り問題について、11月27日に門田晋幹事に相談したが、門田は難色を示した。この日の「日誌」に「門田幹事ニ帝国農会ノ件ヲ相談ス。難色アリ」とある。さらに門田幹事は29日、温に対し帝国農会幹事の件を謝絶するように忠告した。この日の「日誌」に「門田幹事ヨリ帝国農会幹事云々ノ件謝絶スヘク忠告を受ク。蓋シ右ハ日野松太郎君、工藤養次郎君ニ相談ノ上ナリトノ事故大ニ尊重スヘキコトナリ」とある。

だが、帝国農会入りについて、種々勧誘の働きかけが続いた。11月30日にはすでに帝農幹事に就任していた山崎延吉からも温に対し勧誘があった。「帝

12) 米価下落は農家を経済的窮乏に陥れ、かかる不安は食糧問題の解決にも障害をもたらすのみか、不平と窮乏の結果は思想の悪化をもたらし、重大な農村社会問題を醸成する。よって、米価の騰落を緩和する政策を樹立するように、というもの（『愛媛県農会事業報告』第217号。大正9年12月）。

国農会幹事ノ件、山崎延吉氏ヨリ勧誘ヲ受ク」。12月1日には、矢作栄蔵副会長から「五日松山ニ行ク」との電報を受けた。また、農商務省技師の飯岡清雄からも勧誘の手紙が来た。「飯岡君ヨリ同窓ノタメ出^マ盧^マノ勧誘ノ手紙来ル」。2日には、矢作からの勧誘の手紙も来た。「矢作博士ヨリ帝国農会幹事引出ノタメ来^マ県ノ手紙来リ、昨日ノ電報アリタルタメ、五日上京スルニヨリ来^マ県見合ヲ乞^マノ電報ヲ発ス」。

12月、温は出張の連続で多忙を極めた。4日、農商務省の石黒農政課長の要請を受け、農家経済調査の協議のため、午後10時発のくれない丸にて、上京の途についた。翌5日午後1時半神戸に着し、2時40分発にて東上した。6日午前7時半東京に着し、帝国農会に行き、午後1時より農商務省主催農家経済調査に関する協議に列席した。メンバーは大島、藍沢、徳永、島根と温の5人であった。7、8日も同会議に列席した。

12月8日午後温は駒場に行き、矢作副会長と会談している。「五時ヨリ矢作博士ト会談シ、福田君ト三人ニテ陶々亭ニテ食事ヲナス」。文中、福田(美知)は帝農幹事である。なお、会談内容は書かれていないが、温に対し、帝国農会幹事就任が要請されたことは間違いないが、結論は未定である。11日に温は帰国の予定であったが、門田晋幹事が13、14日に開かれる帝国農会主催の全国道府県農会代表者会議に出席するために、上京との連絡を受け、帰国を見合わせた。12日に原熙先生が門田幹事をわざわざ訪問し、温の帝農幹事就任を要請している。この日の「日誌」に「米価維持協議大会出席トシテ、門田晋君及宮脇滋雄君来着。城邊館ニ同宿ス。同時ニ原先生、門田君会談ノタメ来訪セラレ、自分ノ帝国農会幹事就任ノ件ヲ談ス」とある。門田が了解したかどうかは不明だが、おそらく、このとき、温の帝国農会入りがおおよそ決まったものと推測される。

12月13、14日、農業恐慌の下、帝国農会主催の全国道府県農会代表者会議が開かれ、温も門田晋、宮脇滋雄(温泉郡農会長)とともに出席した。13日「帝国農会主催全国農会及農政倶楽部代表者大会開催。門田、宮脇両君ト共ニ

出席ス」。温は13日の夜、帰国の途についたが、この協議会で、帝国農会は米投げ売り防止を決定した。その決議内容は、「各府県ハ此際一斉ニ投売防止ヲ実行スル事、其開始ハ本月二五日迄トス」「価格ハ三十五円ヲ以テ最低度トス」であった¹³⁾。温は、14日夜6時半に高浜に帰着したが、温泉郡では、早くも、投げ売り防止を始めていた。14日の「日誌」に「石井信光君来訪セラレ、米問題ニ関スル宣伝書（各戸配布）ノ文体其他ノ協議ヲナス。温泉郡ヲ初メ各地売止ヲナシツ、アリ」とある。

12月15日、温は、東・西宇和郡での講習会、産業調査等のために、南予に出張の途についた。この日午前9時郡中発自動車にて八幡浜に行き、馬車にて宇和町卯ノ町に行き、宿泊。翌16、17日、温は郡役所にて、町村農会の役職員に対し、講義した。盛況であった。16日の「日誌」に「郡役処楼上ニテ町村農会役職員ノ講習アリ。町村長殆ト出席シ、有力者百二、三十名出席シ、同郡トシテハ無比ノ盛況ナリシ」とあり、また、17日の「日誌」にも「午前講義ヲ終了シ、午後ハ農政倶楽部東宇和支部発会式及米問題ノ協議会アリ、出席ス。非常ノ好結果ニテ、予定ノ如ク協議整ヒタリ」とある。18日は産業調査用にて製紙者と製糸者を集めたが、出席なきため、別の用をなし、19日は八幡浜に行き、宿泊。20日には郡役所にて産調用で水産、工業者を集め、意見を聞いた。21、22日は西宇和郡の町村農会役職員講習会を開催し、30余名に対し、講義を行った。23日には、伊方村に行き、農学校にて、県農会主催の婦人講習会に出席し、350余名に対し講義を行い、24日も午前中講義を行った。終わって、八幡浜に戻り、その夜、船にて、松山に戻り、翌25日8時過ぎ高浜に着した。27日は、知事を訪問し、産業調査の経過及び今後の計画について説明。28日は県農会、産調に行き、用仕舞をなし、29日は年賀状を書き、また、玉利先生へ帝国農会幹事問題に関する状況について手紙を出している。「蓋シ先生ヨリ已ニ自分就決定ノ旨ノ挨拶アリタルカ故ナリ」。30日は大

13)『帝国農会史稿 記述編』303、304頁。

和屋にて忘年会、31日は迎年の用意をした。

第2節 大正9年5月の衆議院議員選挙関係

大正9年（1920）は原敬政友会内閣時代である。また、本年は大正デモクラシー期・普選運動高揚期である。第42議会の2月14日に、野党の憲政会、国民党、普選実行会の普通選挙法3案が衆議院に提出された。原内閣は普選に反対であり、その審議中の、2月26日、原は「所謂普通選挙も左まで憂ふべきにも非ざれども、階級制度打破と云ふが如き現在の社会組織に向て打撃を試みんとする趣旨より納税資格を撤廃すと云ふが如きは実に危険極まる次第にて、此の民衆の強要に因り現代組織を破壊する様の勢いを作らば、実に国家の基礎を危うくする」¹⁴⁾として衆議院を解散し、その結果、5月に衆議院議員選挙が行われることになった。

本県は7つの小選挙区制に分かれ、政友会、憲政会がそれぞれ、候補者を擁立し、激しい選挙運動がなされた。1区（松山市、定員1）は政友・憲政両派が現職の尾崎敬義（無所属、中立）を推薦し、他方、普選派が無所属の押川方義（松山藩士の子に生まれ、クリスチャン、教育者。東北学院の創立者、院長）を推薦した。2区（温泉郡、伊予郡、定員2）は政友会が成田栄信、夏井保四郎、憲政会が門屋尚志、3区（越智郡、周桑郡、今治市、定員2）は政友会が河上哲太、深見寅之助、憲政会が村上紋四郎、4区（新居郡、宇摩郡、定員1）は政友会が岩崎一高、憲政会が森達三、5区（上浮穴郡、喜多郡、定員1）は政友会が高山長幸、憲政会が池田龍一、6区（西宇和郡、東宇和郡、定員1）は政友会が矢野丑乙、憲政会が本多真喜雄、7区（北宇和郡、南宇和郡、定員1）は政友会が渡辺修、憲政会が村上恒一郎（無所属、中立）を擁立した。

以上の、既成政党とは別に農民側、農会側が町村で農会の別働隊・農政倶楽部を作り、また、選挙活動を始めたのが特徴的であった。大正デモクラシーの

14) 升味準之輔『日本政治史 2』東京大学出版会、1988年、319頁。

農村への影響，農民の政治的目覚めである。

石井村でも農政俱樂部が設立された。4月3日，石井村有志50余名が会合し，農政俱樂部の発会式を挙行している。この日の「日誌」に「午后三時ヨリ天山橋ニテ本村有志五十余名会合シ，農政俱樂部ノ発会式ヲ挙ク。右ハ選挙ノ統一ヲナサンカタメナリ」とある。そして，温が農政俱樂部の趣旨，要項の作成を依頼されたのであろう。4日に温は石井村農政俱樂部の主旨要項を起草している。そして，7日夜5時石井村有志40余名が集合し，農政俱樂部の主旨，規約，要項を決定し，また，役員の選挙をしている。8，9日に温は石井村農政俱樂部の規約を起草し，10日石井村農政俱樂部の主旨及び規約を発表した。このように，石井村農政俱樂部の中心メンバーは温であり，趣旨，規約等を温が作成していたことが判明する。

4月12日に温泉郡の農政俱樂部の役員会があった。そこで，来る衆議院議員選挙において，農民主義の候補者を擁立することを決定し，候補選定委員会の結果，予想外にも温に白羽の矢が当たった。この日の「日誌」に「午后温泉郡ニテ農政俱樂部ノ役員会アリ。農民ノ主張ヲナスカタメ，新ニ農民主義ノ候補者ヲ立テ極力奮闘スルコトニ相談シ，為ニ有志ハ各自二百円支出ノ決意ヲナシ，候補選定委員五名ヲ選ヒテ相談シタルニ，結局自分ニ立候補者トナルヘキ交渉アリ。意想外ノ交渉ナレドモ，直ニ拒絶シテハ折角ノ氣勢ヲ挫クヘキヲ以テ，二，三日熟慮ヲ乞ヒ決答スルコト、シテ散会」とある。13日には，宮脇滋雄（温泉郡農会長，温泉郡会議員，前温泉郡荏原村長）が温を訪れ，立候補を熱心に勧めている。「宮脇君来訪。熱心ニ立候補ヲススム」。

また，政友会側も温に立候補を働きかけてきた。4月14日の「日誌」に「自分ノ立候補者問題ハ漸次具体化シ，本日ハ宮脇，武智両君伊予郡ニ町村長会議アルヲ以テ打合セノタメ出席ス。夕，門田晋君ヨリ政友会側ノ意見トモ見ルヘキ交渉アリタリ」とある。

温が候補に挙がったので，本人も面白がっている。4月15日の「日誌」に「議員候補者問題大分面白クナリ，政友会本部ノ問題トナル。新聞社其他来訪

多ク、五月蠅シ」と記している。

4月16日に、県議松木喜一（温泉郡川上村，地主，憲政会）と県議武知勇記（伊予郡南伊予村，新聞，雑誌業，憲政会支部幹事長代理）が温を訪れ，今回の総選挙には，憲政会を脱党しても温を推薦するから，今回は立候補の辞退を要請した。この日の「日誌」に「自分立候補者ノ件，形勢漸次重大トナリ，今朝松木喜一君，武智勇記君自宅ヲ尋ネラレシニ，七時発ニテ出勤ノタメ産調事務処ニ来ラレ，両君立場ノ困難ノ実況ヲ訴ヘ其了解ヲ求メラレ，尚出来得ヘクレバ今回ハ立候補見合ヲ希望シ，スクセバ，次回ハ脱党ヲ期シテモ自分ノ後援ヲナサントノ相談アリ。自分ハ両君ノ意中ヲ了トシ，自分ノ去就ヲ決スルトキハ相談スヘキヲ約シテ分ル。大分面白クナリタリ」とある。それを受け，翌17日に温は，立候補辞退を表明した。「温泉郡農政倶楽部ハ午后大会ヲ開ク筈ニテ，若シモ正式ニ推薦決議ヲナシタリシニハ動キノ取レヌ破目ニ陥ル形勢トナリシヲ以テ，十一時過宮脇君迄断然辞退ノ旨ヲ言明ス。宮内長君，武智太一郎君再ヒ来訪，勧誘アリシモ動かズ。為ニ本日ノ大会ト気拔ノシタ者トナリ，甚タ気ノ毒ナリシ」。なお，文中の宮内長は前県農会副会長，前温泉郡南伊予村長であり，武智太一郎は温泉郡浮穴村長で，いずれも温の熱烈な支持者である。そして，18日に温は立候補辞退の理由を起草し，20日に3新聞に辞退の理由書を掲載した。また，26日に温は，石井村農政倶楽部の総会に出席し，おそらく立候補辞退の了解を求めたものと思われる。「午后二時ヨリ石井校ニテ農政倶楽部第一回総会ヲ開キ，最初ヨリノ経過及役員，規約等ヲ報告シ且ツ主旨ヲ布演シ，及来ル五月二日両候補者ノ立会演説ヲ要求スルコトヲ約シ閉会トス」。

4月29日，温は，北宇和郡農政倶楽部の総会に出席のため出張し，翌30日，参加し，温泉郡の状況を説明した。「農政倶楽部総会ニ出席ス。町村農会長技術者三十七，八名会合。同会設立ノ件，町村支部設置ノ件，候補者ヘ農政倶楽部ノ決議ヲ交渉スルノ三件ヲ議ス。自分ハ所見ト温泉郡地方ノ状況ヲ談ス」。

5月2日、第2区から立候補している憲政会の門屋尚志（温泉郡素鷲村出身、日本綿花重役）が温を訪れた。「門屋尚志君、松木君ト密ニ来訪アリ。農政意見ヲ述フ」。おそらく、温の支持を求めるためであろう。

また、2日に石井村の農政倶楽部が成田、門屋両候補の立会い演説会を開き、終わって、選挙に臨む態度を協議したが、結局は自由投票とすることにした。この日の「日誌」に「正午吉作ニ行ク。午後一時ヨリ成田、門屋両候補立会演説会ヲ催フシ、有権者百二、三十名出席。一時ヨリ成田候補、同三時ヨリ門屋候補ノ演説アリ。後者拙ニシテ引立タス。畢テ幹事残りテ協議ニ移リ、何レカ一方ニ決スルト任意候補投票ノ二説出テ容易ニマトマラズ。結局、任意投票トシ、運動ヲセズ、買収セズ、自然ニ任スコトニ決シ（相原氏、石井氏、自分ニテ決ス）散会ス」とある。

5月10日、衆議院議員の投票日である。温は、憲政会候補の門屋に投票した。「衆議院議員選挙ヲナス。門屋ヲ推ス」。

県下の選挙結果は、1区は押川（無所属、普選派）、2区は門屋（憲政）、成田（政友）、3区は河上（政友）、深見（政友）、4区は森（憲政）、5区は高山（政友）、6区は矢野（政友）、7区は渡辺（政友）が当選し、政友会6、憲政1、無所属普選派1で、政友会の大勝であった。しかし、1区は普選派の押川が当選し、普選派の勝利であった。5月11日の「日誌」に温は「松山市押川方義氏当選。之レ万人ノ予想ニ反スル結果ニテ、民衆大勢ノ向フ処ナリ。温泉、伊予ハ門屋、成田当選」とある。また、全国的に見ても政友会の大勝であった（政友 278、憲政会 110、国民党 29、無所属 47）。

第3節 久松家果樹園関係

温は、久松家の果樹園の管理・監督を続け、時々東野にある久松果樹園に行き、指導している。例えば、1月10日「三時ヨリ東野ニ行キ、状況ヲ視、だに発生ノ状況ヲ見テ、当時ノ指揮ヲナシ…」、2月16日「長尾君ヲ招キ、園ノ近況ヲ聞ク」、6月3日「東野ニ行キ、長尾ト改植ノ見本園及修膳スヘキ岸ヲ

見，不在中予算ノ提出等ヲ托ス」，9月18日「久松家別邸へ送ル十月分，十一，十二月分果園経費予算ヲ作成，郵送ス」等々。

第4節 米麦作関係

2月12，13日に，麦作地に留吉，春吉を雇い，施肥を行っている。

3月2日に，二宮要次郎を召使として雇っている。「本日ヨリ二宮陽次郎出勤。月二十日出勤，一日金二十五銭ニテ召使ヲ約束ス」。

3月13日に，本年度の苗代の品種を定めている。大ぶけ・前田・神宮寺（2反6畝）は早神力，亀次作東（5畝）は早神力糯，その他全部（3反2畝）は小雄町。ここから，温の自宅の田の自作地は，6反3畝ほどである。

3，4月も麦修理をしている。3月23日には吉太郎父子，留吉，槌太郎を雇い，麦修理をし，4月8日には留吉，吉太郎，新次を雇い，浦田，前田の麦修理を行っている。本年の麦修理は雨のため遅れていた。8日の「日誌」に「右ニテ一番修理終了。一方ニハ二，三日前ヨリカキ立ツナスモノアリ。本年ノ如ク雨ノ為（大雨ニアラズ）妨ケラレテ，麦修理ノ後レタルハ曾テナシ」とある。15日には，吉太郎，留吉を雇い，前田2枚，浦田西半，亀次作大部分へ施肥をしている。

5月7日，大雨と強風のため麦が大部分倒れ，大きな被害があった。この日の「日誌」に「大雨。午后四時過ヨリ強風加ハリ，麦ハ殆ト全部倒伏ス。今後順調ニ行クモ尚半作ハ免レサルヘシ。高価ノ肥料ヲ多ク施シタル者少ナカラズ。小農ノ惨状想フベシ。農モ亦危険ナリ」とある。

5月上旬，苗代の季節となった。岡田家では，10日に農事試験場から粳種子を取りよせ（小雄9升，早神6升。早神力糯1升），苗代を作り，14日に苗代に種子を蒔いている。「苗代作粳蒔…。要次郎出ツ。宅ヨリ小雄八升ト早神五升二合ト早神糯八合ヲ出シ，播種ス」。

5月末から6月上旬，麦収穫の時期となった。岡田家では，要次郎や春吉，留吉等を雇い，5月31日から6月3日にかけて，浦田，前田，亀次作の裸麦

を刈り、扱っている。

6月下旬、田植えの季節となった。岡田家では、要次郎と留吉を雇い、6月30日に大ぶけ（早生神力）、7月1日に亀次作（東の1反6畝は小雄、西4畝は早生神力糯）と浦田（小雄）、2日に小田（小雄）、前田（早生神力）、前田下（小雄）に田植えた。

田植え後は稲作の手入れをした。7月7日施肥（大豆粕、硫酸の混合）、9日除草、10～12日田打ち、15日除草、19日2番除草、8月3、5日追肥（真粉、大豆粕、過磷酸石灰の混合）等々。

本年の稲作生育状況であるが、螟虫の被害が見られた。8月5日の「日誌」に「本年ハ螟虫被害近年ニナキ多シ。尤モ甚シキハ日野ノ春吉宅、裏田ト北土居分、卯太郎ノ三角田、次テ久太郎ノ両屋敷等ニテ。自宅ニハ浦田尤モ多キモ、前者程甚シカラス。各田其部分々々ニ一坪～二、三坪被害アリ。殊ニ一株一本位ノ枯葉ノ見ユル者ハ非常ニ多キハ第二期ノ発生ヲ氣遣ハル」とある。10月1日、温は自作田の稲生育状況を次のように観察している。「初メテ大ぶけノ稲ヲ巡視ス。葉枯比較的甚シキモ、昨年ノ亀次作ヨリ被害軽ルカルヘシ。近年ナキ出来込ナリシガ、目下ノ見込ハ三石内外ナラハ良キ方ナリ。殊ニ西北部ハ出来込頗ル不良ナリ」。余り芳しくないようであった。

10月下旬から11月にかけて、稲刈りの季節となった。岡田家では、10月18日に北土居のつるを雇い、大ぶけと前田（早生神力）の稲刈りをしている。そして、11月1日に早生の粃摺りをしている。不作であった。この日の「日誌」に「早物粃摺ヲナス。大ぶけと前田ニテ一切計算シテ十二ニ足ラス。近年ノ不作ナリ、但シ大ぶけハ出穂前一回殆ト浸水シ、為ニ劇シキ葉枯病ニ罹リタレバナリ」とある。

11月3日に亀次作の稲刈り。他の田の稲刈りの記事は無く、不明だが、およそこの頃刈取りがなされたものと思われる。そして、11月23日に長太郎、政太郎、槌太郎夫婦、要次郎母子の6人を雇い、粃摺りした。そして、収穫高について、「本年度、稲作成績ノ如シ。早神力（大ぶけ、前田）一反九畝。早

神力糯（亀次作西方）約四畝半。小雄（前田下，浦田，小田，亀次作一反五畝半）二反一畝半。早神力十二俵ト小米，下米少々。糯。小雄」とある。早生の収穫高は1反9畝で12俵（4.8石）ゆえ，反あたり2.53石に過ぎず，不作であった。また，他の雄町の収穫高が不明だが，おそらく不作であったと思われる。

なお，大正9年（1920）秋の米の収穫高であるが，全国的には，6,312万8,305石で，前年の6,075万1,608石に比し，237万6,697石の3.9%の増収で，2年連続の豊作であった（反収は1.96石から2.02石へ増大）。他方，愛媛県は，109万1,438石で，前年の大豊作114万6,280石に比し，5万4,842石，4.8%の減収で不作であった（2.41石から2.29石へ減少）。また，温泉郡も27万2,089石で，前年の28万3,155石に比し，1万1,066石，3.9%の減少（反収は2.75石から2.64石へ減少）で，やはり不作であった¹⁵⁾。温の自作田も同様であった。

11月28日に，岡田家は，留吉，槌松，政市，要次郎，岩子にて，麦蒔きをしている。亀次作の東1反6畝に小麦（伊賀築後），浦田，小田，前田，前田下は裸麦の紅サン（紅梅3号）であった。

第5節 家族のことなど

温の娘の次女・禎子は、大正9年（1920）春，東京女子大（大正7年創立，学長新渡戸稲造）入学のために，東京の末光元廣（清香の夫・末光順一郎の兄。陸士21期生，陸軍中将）宅に下宿し，受験勉強中であった。温は東京への出張中の2月3日に，禎子の入試の件で東京女子大の学監安井てつに面会している。この日の「日誌」に「午後，東京女子大学ヲ訪ヒ，安井哲子氏ニ面会シ入学ニ関スル校規ヲ聞ク」とある。また，温は，禎子が東京女子大入学失敗のことを考え，日本女子大の受験準備もしていた。2月14日の「日誌」に「高・

15) 加用信文監修『改定日本農業基礎統計』194頁。各年次『愛媛県統計書』

女ヲ訪問シ、禎子証明書ヲ貰ヒ、直ニ本人ニ送ル。右ハ万一京・女失敗ノ場合ノ用意ニ日本女子大志願ノ手續ヲナサンカ為ナリ」とある。東京女子大の入試が3月29日にあり、4月10日に発表があった。合格であった。「禎子東京女子大学入学試験合格ノ電報アリ。直ニ三輪田元道氏へ保証人ヲ、安井哲子氏へ挨拶及当人へ手紙ヲ出ス」。そして、禎子は入学した。12月からは東京府西大久保四七八下村内に移っている。

この年、岡田家に、親類に不幸が続いた。温の長女・清香の夫である末光順一郎が亡くなった。順一郎は末光家（南吉井村南野田）の4男であるが、家督を継ぎ、4町歩の農地を耕し、また、青年団長を務め、部落のホープであった。清香と結婚してまだ7年足らずに過ぎなかった。しかし、この年、順一郎はスペイン風邪に罹った。2月18日の「日誌」に、「順一郎流感、肺炎、チブスニテ大患」とある。そして、19日に危篤となった。さらに不幸が続く。22日に孫娘みゆき（順一郎・清香の娘、次女深雪、5歳）も病気になる、入院し、24日に急逝した。温はこの日の「日誌」に孫娘の死について「父ノ病氣ノタメ、父母、祖父母ニモ逢ハズ、僅カニ曾祖母ニ抱カレテ死ス。憫レムベシ」と記している。当時、深雪は、父の病氣、母の清香が妊娠していたため、温宅が面倒を見ていたのだったが、亡くなった。そして、26日には父の順一郎が亡くなった。26日の「日誌」に順一郎の死について「十二時過中食中へ末光ヨリ特使来リ、順一郎模様悪変ヲ伝フ。急キ車ニ乗リ、平林赤十字副院前ヲ訪ヒ、不在ナリシタメ、大西医院ニ行キ往診ヲ乞ヒ、自分ハ人車ニテ末光ニ至ル。嗚呼遺憾。順一郎最早此世ノ人ニ非ス。茲ニ万事休ス。思ヘバ去二十一時危篤ノ処へ永富技師ヲ聘シ、ワクチン注射ヲナシ、殆ト奇効ヲ奏シ、漸次良好ニ向ヒ、昨日マテモ今朝迄モ十中八、九ハ全快ナラント言ヒシモ、天命ノ盡クル処如何トスヘカラズ。何等ノ新原因アルアラスシテ、心臓麻痺ヲ起シ三十年ヲ一期トシテ白玉楼中ノ人トナルモ、父母アリ、妻子アリ。事情殊ニ憫ムベシ。同夜ハ通夜ヲナス」と記している。28日に順一郎の葬儀に出席した。

なお、清香はこの当時妊娠中であり、5月27日、女子を出産した（満子）。

さらに、親戚に不幸が続いた。8月23日、荏原村の叔母（温の母の妹・クマ、岡田三郎に嫁ぐ）が死亡した。また、9月4日には、岡田三郎叔父も亡くなった。

なお、温の妹のケイは東京にいた。住所は西多摩郡調布村千ヶ瀬榎本政次郎内であった。

温は、歳末、1年を振り返り、次のように述べている。

「本年ハ大体ニ於テ不幸ノ多キ歳ナリ。二月下旬最信頼セル順一郎ヲ失ヒ、八月末宇摩郡ニテ病氣ニ罹リ、帰宅後三十余日病床ニ臥シ、伊予物産株式会ノ株ヲ持タルニ非常ノ損失ヲナシ、遂ニ解散ノ止ムナキニ至レリ。然シ一面ニハ農商務省ヨリ小作調査ノ囑託ヲ受ケ、帝国農会ヨリハ就任ヲ強要セラル等、自己発展ニハ一新路ヲ生シタルカ如シ。実ニ人間万事ハ塞翁ノ馬ナリ」。

第3章 大正10年

大正10年（1921）、温50歳の年である。この章では、温が上京し、帝国農会の幹事に就任する4月16日までの、温の活動について述べよう。

第1節 愛媛県農会技師、愛媛県技師活動

本年（1921）、温は正月早々から自宅で産業調査の表を作成し、また、その説明及び判断を起草し、6日から出勤し、産業調査の表の説明等に従事した。7日「水産ノ説明及判断ニ着手ス」、8日「表ノ説明及判断ノ起草」等。8日に県農会の職員に対し、温の帝国農会入りの件の経過を話している。

1月11日から郡農会長会および郡技術者協議会を県農会楼上にて開催した。門田晋幹事と多田隆技師は帝国農会におけるコメ問題会議に出張していたため、温が会議を指揮した。大正10年度の事業方針を決めたが、米不売運動の折であり、会議は盛況であった。11日の「日誌」に「今回ハ米不売問題ノタメ会議大ニ賑フ」とある。12、13日も会議を続け、また、上京していた門田幹事が13日の夜、帰国したため、14日も郡農会長会議を開いた。14日の「日

誌」に「県農会ニテ引続キ協議会ヲ開ク。門田幹事昨夜帰省，出席。帝国農会ノ協議状況ヲ報告シ協議ヲナシ，午前中ニテ会議ヲ閉ヂ，午後秘密会ヲ開キ今後方針ヲ協議ス」とある。秘密会議まで開いており，農会側の只ならぬ雰囲気¹⁶⁾が伺われる。

1月下旬以降，温は専ら産調の原稿執筆に取り組んだ。20日「終日自宅ニテ産調全般調査ヲナス」，22日「産業政策基礎要項ヲ草ス」，23日「終日自宅ニテ工業調査ノ説明ヲ草ス」等々。

なお，1月22，23日の両日，東京の帝国農会で，米投げ売り防止運動に関し，第2回の道府県農会代表者協議会が開催され，愛媛からは門田幹事が出席し，「米ノ投売防止ニ関スル今後ノ方法如何」が協議され，「尚一層結束ヲ鞏固ニシ所期ノ目的ヲ貫徹スル」ことを決議している。そして，各府県1名以上の米価問題遂行委員を上京，滞京させ，連日のごとく政府や貴・衆議員に働きかけた¹⁶⁾。

また，1月25日に，温の母校の講農会会長に推薦の電報が来ている（後述）。

2月も，温は種々の業務に従事した。3，7日に生活改善同盟会幹事会，8日は産業調査について，庁内主任技師を集め説明，9日は門田幹事と米問題の協議，等々。

2月10日，温は母校の危機（東京帝大農学部実科廃止問題）に対し，上京の途に着いた。公用は産業調査であるが，実際は実科廃止反対・独立運動及び米問題等の用務のためであった。翌11日午後1時着京。以後17日まで，温は運動に従事し，各界に働きかけた（後述）。

2月18日午後8時，温は帰松し，以降，19日は郡勧業主任会，20日は南伊予村に行き，農業基本調査の説明，25日からは産業調査庁内委員会を開催した（～3月1日）。

16)『帝国農会史稿 記述編』306頁，『帝国農会史稿 資料編』990頁。

2月24日に温は、玉利先生に対し、帝国農会幹事就任承諾の挨拶を出している。「玉利先生へ帝・農・幹事就任承諾ノ件ニ付挨拶ヲ」。

また、2月25、26日の両日、東京の帝国農会で、米投げ売り防止運動に関し、第3回の道府県農会代表者協議会が開催され、愛媛からは門田幹事が出席し、「投売防止ニ関スル今後ノ方策」について協議され、「産米需給ノ調節ヲ図ル為米穀法ノ施行ノ日ヨリ平均売（共同販売）ヲ実行スルコト」が決議された。当時帝国議會に政府より「米穀法案」が2月23日に提出されており、事実上、米投売り防止運動の収束・終結の会議であった¹⁷⁾ 上京中の門田幹事は3月2日に帰国した。

3月も温は種々業務を行った。2日石井村の青年会講習で講演。3日試験所養成処生徒に農政一般についての講話、4～9日産業調査委員会提出案の準備、10、11日産業調査庁内委員会を開催、12～14日知事、部長らと産業調査委員会提出案につき協議。

3月20日から産業調査委員会を開催した。205名の委員中130余名が出席。温が調査の方針及び所感について説明し、24日まで会議が行われた。24日の「日誌」に「産・調委員会。午前各部長ノ報告、午後尚右報告アリ。畢テ井上要氏ノ提議ニヨリ委員説成立シ、二十二名ノ委員ニ一切ノ整理、布演、補足ヲ托スルコトニ決議シ、右委員ヲ選ミ報告シ、知事挨拶ニテ閉会。終後ハ頗ル呆気ナシ。午后四時ヨリ調査事務員ノタメ亀乃井ニテ慰労会ヲ催フス。自分以下一同主客ニテ知事、内務部長、勸業、学務、林務、各課長出席。十一時半迄遊興。十二時過帰ル」とある。

3月25日、米穀法案が両院を通過し、成田栄信衆議院議員より通知を受けている。「成田代議士ヨリ米穀案通過（両院）ノ通電アリ」。

3月26日から28日まで県農会主催の町村農会事業研究会・町村農会長会を開催した。

17)『帝国農会史稿 記述編』306、307頁、『帝国農会史稿 資料編』992頁。

4月も温は、講義、出張等種々業務を行い、1、2日は養成処の講義を行った。2日に帝国農会の矢作栄蔵から6日に上京せよとの電報が来て、また3日には手紙も来ている。それに対し、温は、講習等があり、3日に矢作に対し、「6日上京不可能」との電報を発した。3日から温は喜多郡婦人講習のため新谷村に出張し、翌4日から新谷村公会堂にて婦人講習会を開催し、講義した。6日講義が終了し、午後4時半、証書授与式を挙行し、58名に証書を授与した。そして、翌7日朝9時発にて帰松の途につき、12時着松した。帰松後の8日は技術者養成処の入所試験の口頭試験を担当し、9日以降も県農会や県の産業調査資料の手入等を行った。

4月14日、温は、度重なる帝国農会の要請を受け、上京出発の途についた。この日は高浜から尾道に渡り、奈良に宿泊。15日奈良を見物し、午後3時大阪梅田発にて上京し、翌16日8時東京に着し、帝国農会に出頭し、矢作栄蔵副会長と会見した。温は9月から就任を懇請したが、矢作が承知せず、ただちに就任することになった。この日の「日誌」に「八時着…。一旦勝山館ニ着キ、帝国農会ニ出頭ス。就任ハ九月ヨリト懇請セシモ矢作副会長承知セス。直ニ就任スヘク強要セラレ大体承知ス」とある。

以上、4月16日から温は帝国農会幹事に就任した。帝国農会幹事・岡田温の誕生である。

第2節 講農会会長就任、東京帝国大学農学部実科廃止問題等

昨年の大正9年(1920)11月ころ、原内閣下の文部省内における会合の席上、松浦専門学務局長が「東大農学部実科の如きは将来之を廃止すべきなり」ともらし、伝えられて、農学部実科の在學生及び卒業生に一大衝撃をあたえ、在學生たちが騒ぎ出し、また、卒業生が立ち上がった。当時講農会の幹事長は藤巻雪生(明治38年卒業、農商務省農務局)で、藤巻は恩師の原教授を訪ね、適切な教示を得、そして、12月14日に講農会幹部会及び東京会員を招集して、独立問題について協議し、大いに運動を起こすことを決め、そして、15

日に農・林・獣の3科卒業生の臨時大会を開催し、実科独立期成同盟会を結成し、実行委員（のち、交渉委員）を選出した。16日には講農会の臨時総会も開き、独立運動を始めた。農商務省技師の飯岡清雄は、病気欠勤の届けを出してまで、運動を始めた¹⁸⁾

大正10年（1921）に入ってますます実科独立運動を強化した。講農会の会長は明治39年（1906）11月以来横井時敬博士が続けていた。1月14日に講農会は幹事会を開き、横井先生に迷惑をかけてはいけないと会長辞任を求めることを決め、21日に幹事長の藤巻雪生（交渉委員会の委員長）らが横井に会い、辞任を了解してもらった¹⁹⁾

そして、横井の後任会長に白羽の矢が当たったのが、温であった。1月23日、講農会は通常総会を1ヶ月繰り上げ、会長の改選を行い、満場一致で温を新会長に選出した²⁰⁾ 1月25日、温に講農会長就任への要請があった。この日の「日誌」に「講農会ヨリ会長推薦ノ電報来ル」とある。28日、温は、藤巻雪生幹事長と飯岡清雄幹事に対し、自分を会長に推薦した真相及び質問の手紙を出した。29日には、内藤友明（幹事）より講農会を自治制とし、温を会長に推選するとの手紙がきた。また、2月3日に藤巻幹事長より講農会長問題について詳細なる手紙が来た。そこで、6日、温は会長就任を承諾した。「藤巻君へ講農会長承諾及上京ノ手紙」を発信した。おそらく、実科廃止問題への危機感が温を講農会長に担ぎ出し、そして温も就任の決断になったと思われる。温はまだ、愛媛にいたのだが、温の人望ぶりが伺われよう。

2月10日、温は実科独立運動のために上京した。この日の日誌に「上京出発。公用ハ産業調査向ナリシモ、実科独立運動及米問題等ヲ用務ノ主トス」とある。11日午後1時着京し、温は直に赤坂三会堂にて開催の農・林・獣の3

18) 駒場交友会『母校独立記念号』昭和11年、63～64頁、112～119頁、336頁。

19) 駒場交友会『前掲書』115～116頁。横井は「大して驚かれもせず、併し余り良い顔もせず、謂わば不承不承に夫れもよいでせうとの一言あったのみであった」と藤巻は記している。

20) 『講農会報』第126号、大正10年9月。

科聯合大会に出席した。この大会で運動の盛り上げ、3科を合同した団体・駒場校友会を設立することを決定した。そして、この日の夜8時頃より温は藤巻と共に駒場に原熙先生を訪問している。12日は帝国農会を訪問。13日は横井時敬先生宅を訪問し、午後三会堂における実科運動員会に出席している。14日は帝国議會図書館にて各代議士に面会し、実科問題を依頼。15日は帝国議會を傍聴。16日は赤石武一郎とともに帝国農会における政友会所属農政研究会代議士会に列席し、実科問題について農政研究会代議士に依頼し、17日は農商務省にて、飯岡、藤巻、畑中、宇都氏と会合し、実科運動に関し協議をし、今後は持久運動をなすべく注意を与えて別れ、午後5時20分発急行にて帰途に着いている。

なお、交友会の会頭は西小路吉光（林科）、副会頭は原鉄五郎（農学）がなり、実際の中心は原が中心となり行った²¹⁾

そして、粘り強い運動の結果、院内の空気も変わり、2月26日に有馬秀雄代議士外4名、賛成者96名の多数を持って、建議案「東京帝国大学農学部実科に関する建議」が議會に提出され（内容は実科を独立させ、専門学校にする）、3月26日通過した²²⁾

第3節 米麦作関係等

1月23日に留吉、吉太郎、春吉、要次郎を雇い、浦田と小田の麦修理を始め、24日、25日も留吉、吉太郎等を雇い、麦修理を行っている。

2月25日には、春吉を雇い、前田、浦田、小田、亀次作の麦に追肥を施し、27日にも要次郎が前田、小田に施肥をしている。

3月19日には留吉、吉太郎、要次郎を雇い、麦に土入、浦田へ下肥を施す等している。

21) 駒場交友会『前掲書』338頁。

22) 駒場交友会『前掲書』157～167頁。

第4節 家族のことなど

娘の長女・清香は、前年、夫を亡くしたあと、末光家で、3人の子ども（照香、権一郎、満子）を育てているが、よく、実家に帰って来ていた。

娘の次女・禎子は前年4月東京女子大に入学し、学生を続けている。

4女の綾子は、3月石井小学校を卒業し、高等女学校に進み、3月22、23日に高等女学校入学試験があり、合格し、入学した。

長男の慎吾は、8歳で石井小学校に通っている。

温の妹のケイは東京にいて、苦しかったのか、3月温に対し、送金の依頼があったが、温は断っている。3月22日「ケイ子転任云々ノ件及送金ノ依頼アリシモ、同人ノタメ送金セサル旨返事ヲ出ス」。ケイは染谷成章氏宅に同居している。3月13日「染谷成章氏奥様（下谷上根岸町八十一）ケイ同居ノ挨拶」。

その他、本年3月14日に岡田家に電気がついた。この日の「日誌」に「電気点燈。慎吾大ニ喜び、直ニ禎子ニ手紙ヲ出ス。今日ヨリ分化生活ニ入ル」とある。